

■ 書 評 ■

カラー版 神経科学—脳の探求—

加藤宏司，後藤 薫，藤井 聡，山崎良彦●監訳
ベアー，コノーズ，パラディーン●著

東京薬科大学生命科学部教授 工藤佳久

20年以上も前になるが，コールドスプリングハーバーで毎夏行われていた，神経科学に関する3週間のサマーコースに参加したことがある。ここでは，文字通り朝から晩まで(時には翌日まで)，みっちり神経科学の講義が行われていた。3人の責任講師の他に，3日ごとに著名な研究者が参加し，その専門分野についてみっちり講義してくれた。受講者によりよく理解させるにはどうすればよいか，講義に使われるスライドや資料の作成，解説の方法にはそれぞれの講師の工夫と努力がなされ，実にわかりやすいのである。

自分自身が民間研究所から大学に移籍して神経科学の講義を担当することになったとき，何とかしてあのときと同じような講義をしたいと思った。そのためによい参考書が欲しいと探し求めていた折，Neuroscience meeting の book store で出会ったのがこの本の初版である。10年以上前であった。

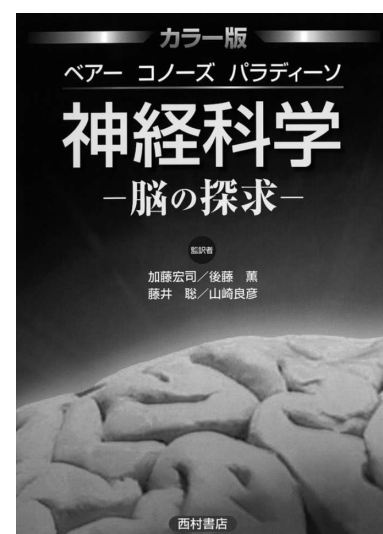
最初に目を引かれたのは，ぱらぱらとめくったときに飛び込んでくるカラー図の素晴らしさであった。そして，ところどころにちりばめてあるBoxに，手際よく解説された専門知識や技術，著名な研究者が語る発見への道筋の話など興味を引く内容

を見て，コールドスプリングハーバーの講義を思い出した。まさに私の求めていたのはこの本だとばかり，即座に購入して持ち帰った。読み始めると，非常にわかりやすい文章で書かれており，時折，しゃれた表現にも出合うことができ，読んでいて楽しい。しかも，これまでこの種の参考書にはなかった，知識としてしっかりとしみこんでくるような実感があつた。

この本を軸として半年間の神経生物学の講義録を作り，学生にプリントを配って講義をした結果，評判がよかったので，数年後にその講義録をまとめて『神経生物学入門』(朝倉書店)として出版した。しかし，これはあくまで原典である本書への入門書と位置づけている。

山形大学生理学講座の加藤先生のグループが本書を訳しているとのことで，期待していた。それが完成して出版の運びとなった。完成した本書を手にしたとき，見事なカラー図の再現，原書の特徴をまったく損なうことのない体裁，読みやすい訳，期待以上の仕上がりに驚かされた。

訳本はいらないと言われる先生もおられる。もちろん，英文を読んで理解することがよいには違いない。しかし，しばしば，学生は英文を理



解したところで，内容を理解したと勘違いすることがある。私たちの脳は日本語をベースとして機能しているので，英語で理解した知識をそのまま自身の知識として蓄積することはかなり難しいし，なにより，日本語の教科書のような流し読みができない(恥ずかしながら，筆者の実感である)。質のよい訳本は間違いなく理解を高め，そして早める。その意味で，本書が現在，神経科学を学んでいる学生，これから学ぼうとする学生にとって有効であるばかりではなく，神経科学の講義を担当する教員にとっても非常に有効であると確信している。

B 5, 712 頁

定価 7,980 円 (税 5 % 込)

[ISBN 978-4-89013-356-7]

西村書店刊